

農薬と環境の汚染の問題を論ず

MELLANBY, K. (1967): *Pesticides and pollution*. London, Collins, 221pp.
(約1,600円)

著者は、以前イギリスのロザムステッド試験場のこん虫部主任であり、現在、自然保護・管理関係のモンクス・ウッド試験場で所長の地位にある。この本は、主としてイギリスでの実例を豊富に挙げながら、空気や水の汚染も含めて、わたしたちの身の周りがどのように汚れ、また、そうした汚れによって、わたしたちが自然保護の対象にしている生物がどのように影響されているかを論じている。

有名なロンドンのスモッグをもつイギリスであるから、大気汚染はこの国では古くから深刻な問題である。この本でも、かなりなページを大気汚染にあてているが、特に目新しい議論はなさそうである。

下水の発達したイギリスやヨーロッパ諸国では、都市の汚水処理の技術は発展しているはずであり、わが国ほど無責任な工場廃水のたれ流しは少ないであろうが、人口密度の高いイングランドでは、水質汚染はやはり重要な問題となっている。水質汚染研究所という研究機関が盛んに活動しているようである。わが国同様、洗剤が問題になっていて、この本のなかでも、分解しにくいハード型洗剤の駆逐が強調されている。さらに著者は、DDTの魚類に対する悪影響をとくに論じている。それは、直接の毒性ばかりでなく、餌になる水生のこん虫など無脊椎動物を殺すという点で影響が大きい。

放射性物質による汚染、油などによる海洋や海岸の汚染もそれぞれ一章を設けて扱われている。

農薬による汚染がこの本の主要部分になっており、除草剤、殺菌剤、殺虫剤、その他の順で、薬剤名を挙げながら具体的に論じている。

著者の意見では、いまのところ、イギリス本国では、除草剤は野外生物にとってたいした危険はない。一般に使われている除草剤は、毒性、持続性の点でそう強いものではないからである。殺菌剤についても、影響はさして大きくないが、有機水銀などを長い期間用いた場合の効果には、注意深い観察が必要であるし、殺菌剤の腐生土壌菌への影響も将来問題になるかもしれない。

「殺虫剤と害虫防除」の章には58ページがあてられており、そのあと「他の無脊椎動物の防除に用いられる薬剤」、「害獣・害鳥の防除」という2章も添えられている。殺虫剤をはじめ有害動物の防除に用いられる薬剤のもたらす数々の深刻な影響 — 人間や飼育動物・保護動物に及ぼす直接の毒作用、自然界の種間関係の攪乱、抵抗性系統の出現、など — については、すでに数多くの貴重な論議がなされてきたが、この本では個々の薬剤あるいは動物の種類について問題点が具体的に示されていて、教えられるところが多い。

最後の章では、将来への問題提起がされている。特に目新しい点はないが、総合防除として、天敵、不妊化法、フェロモンなどの利用も、そつなく触れられている。ただし、著者は、新しい不妊剤の開発に力点がおかれすぎることには反対している。なぜなら、これらの薬剤は、現在用いられている殺虫剤の多くのもより、人間への毒性などの点で、もっと好ましくない副作用を示す可能性が大きいからである。(四国農試 大竹昭郎)